

《平成 29 年度 第 37 回 JANS 若手研究推進委員会交流集会のご報告》

若手研究推進委員会では、JANS 第 33 回学術集会の交流集会から第 36 回までの 4 年間に渡り、一貫して次世代を意識し、看護の未来展望に焦点を当てたテーマでディスカッションを行ってきました。第 5 回の節目でもある今回の交流集会では、キャリアデザインとキャリアドリフトの実際に焦点をあてました。初日の午前中の開催にもかかわらず、約 90 名の参加がありました。ご参加頂きました皆様ありがとうございました！以下、交流集会概要のご報告です。



【交流集会テーマ】

無限に広がる看護の可能性を具現化するために！—キャリアデザインとキャリアドリフトの波を乗り越えよう

既存の看護の役割に捉われず、新しい視点を持ってキャリアドリフトし、さらなる活動へ動き出すためにはキャリアについてどのように考えたらいいのか。看護職は活躍の場が多様であり、いかようにもキャリアデザインが可能であるため、かえって迷いも多いのではないのでしょうか。

若手が実際に直面している課題について、数歩先を歩んでいる先輩であるオフィス KATSUHARA 代表勝原裕美子氏から、研究や実践の中で生まれる新しいシーズ（種）を発芽させて行動化を起こすための具体的な方法について話題提供をして頂きました。さらに、我々の世代からは NPO 法人妊婦のくらし代表/NPO 法人フィット・フォー・マザー・ジャパン理事の長坂桂子氏から、抱えているシーズをどのように行動化させるかについて、研究と生活の組み立て両方の側面から具体例を提示して頂きました。

お二人の話からは、キャリアデザインには、まず自分が看護において何を大事にして、何を成し遂げたいのかという軸を定めることがエッセンスとして示されていました。そして、自らが関心を寄せる軸が定まったら、それを徹底的にやってみる。その中で、仲間が集まり、ポジションが生み出され、実現したい事に近づいていくという具体例が紹介されました。キャリアデザインというと、あらかじめ計画的に物事を進めていくようなイメージが強いように思います。他方で勝原氏からは、自らのキャリアにおいて大事にしていたのは、スタンフォード大学のジョン・D・クランボルツ教授によって提唱された「計画的偶発性」に近いという話もありました。フロアからは、現在抱えている困難さについての具体的な質問が多く寄せられ、それに対して「一人で全て解決はできないから、仲間をつくって分担して取り組む」「研究の成果を、実践の場で自らが示して上司の理解を得る」「いろんな場に出かけ、アサーティブに発言したくさんのネットワークをつくる」「嫌いな仕事があるから、自分が好きな仕事大切にしたいことがわかる」など多くのポジティブかつ、具体的な意見をお二人から頂きました。若手看護学研究者・実践者は、キャリアデザインやドリフトに向かう手前で多くの悩みを抱えている現状にあり、これが課題となっていることが、ディスカッションを通して確認されました。

～参加者の声～

- 「具体的な話が聞けて、元気になりました」
- 「現状の課題を解決するための、指針が得られました」
- 「前向きなメッセージがたくさんあり、自分も頑張ろう！という気持ちになれた」